



3級 第6回

接続詞（4）



一般社団法人

日本ビジネス要約協会

Japan Business Digest Association

接続詞(4)

■説明

接続詞についての学習もいよいよ仕上げの段階に入りました。ここまでの学習についてきてくださったみなさんは、もう接続詞への理解はかなり深まっているのではないのでしょうか？

さて、今回は接続詞に似た役割をしてくれる「接続助詞」について、学んでみましょう。

「接続詞」は文と文をつなぐ役割を果たしていましたね。一方、「接続助詞」は文の中にあって前後の文節（連文節）をつなぐ働きをしてくれる助詞のことです。なぜ接続助詞を使う必要があるのでしょうか？ そうです、要約文を作成する際に、文と文をつなぐ必要がでてくるからですね。要約をする際には欠かせないテクニックです。

では、まずは接続助詞の種類について見ていきましょう。

【接続助詞の種類】

- ①順接・・・前の事柄に対して後を順当な関係でつないでいます。
(例) 疲れたから、眠ろう。
- ②逆接・・・前の事柄に対して、後を逆の関係でつないでいます。
(例) 疲れたけれど、勉強しよう。
- ③並立・・・前後を対等につなぎます。
(例) 大人もいれば、子どももいる。
- ④補助・・・前後を補助の関係でつないでいます。
(例) ゆっくり休んでいる。

このように接続助詞を使えば、2つの文の意味を変えずに、1つの文としてつなぐことができます。

■例題と解説

では、前回の練習で使った文章の「接続詞」を「接続助詞」を使って1つの文章につなぐ練習をしてみましょう。中には、1文にならないものもあるかもしれません。文章の意味を変えてまで無理につなげることをしないよう心がけてくださいね。

1) 雨が降りそうだ。(だから)、傘を持って行こう。

→ _____

2) 雨が降りそうだ。(しかし)、傘は持っていきたくない。

→ _____

3) 雨が降りそうだ。(また)、気温も下がってきた。

→ _____

4) 雨が降りそうだ。(しかも)、雪に変わりそうだ。

→ _____

5) 雨が降りそうだ。(一方)、風が収まってきた。

→ _____

6) 雨が降りそうだ。(あるいは)、嵐になるかもしれない。

→ _____

7) 雨が降りそうだ。(というのは)、雲の動きが速いからだ。

→ _____

8) 雨が降りそうだ。(ただし)、降り始めは夕方かもしれない。

→ _____

9) 雨が降りそうだ。(すなわち)、雲ゆきが怪しいのだ。

→ _____

10) 雨が降りそうだ。(いわば)、作物には天の恵みだ。

→ _____

11) 雨が降りそうだ。(ところで)、あなたは傘を持っていますか？

→ _____

いかがでしたでしょうか？ 難しいですね。

では、一緒に解答例を見ていきましょう。

- 1) 雨が降りそうなので、傘を持って行こう。
- 2) 雨が降りそうだけれど、傘は持っていきたくない。
- 3) 雨が降りそうだし、気温も下がってきた。
- 4) 雨が降りそうなおうえ、雪に変わりそうだ。
- 5) 雨が降りそうな一方で、風が収まってきた。
- 6) 雨が降りそうだし、嵐になるかもしれない。
- 7) 雨が降りそうだというのは、雲の動きが速いからだ。
- 8) 雨が降りそうだが、降り始めは夕方かもしれない。
- 9) 雨が降りそうというのはまさしく、雲ゆきが怪しいのだ。
- 10) 雨が降りそうだということは、作物には天の恵みだ。
- 11) 雨が降りそうだけど、あなたは傘を持っていますか？



■ 寄り道 (コラム)

接続詞や接続助詞は、前と後ろの文章や文節がどのような関係なのかを示すものですが、実は、筆者がそれらについてどのように感じているかを示すものだとも考えることができます。

例えば、

雨が降りそうだ。() 庭の手入れをしよう。

という文章があったとします。

この()の中に入る接続詞には、いくつか候補がありそうですね。

ここに、順接の接続詞の「だから」を入れると、「雨が降りそうだ」ということに対し、筆者は「庭の手入れをする」ことを当然のことのように受け入れていることを表しています。

一方、ここに、逆接の接続詞の「しかし」を入れると、「雨が降りそうだ」ということに対し、「庭の手入れをする」ことが、筆者の期待するタスクではないと感じていることを表しています。

そして、ここに、転換の接続詞の「さて」を入れてみると、「雨が降りそうだ」ということに対し、「庭の手入れをする」ことは、筆者の気持をサッと切り替えてするタスクである受け止めていることを表しています。

ちなみに、この文章は、接続詞がなくても意味は通じます。接続詞を入れずに「雨が降りそうだ。庭の手入れをしよう」としても、全く意味がおかしくなることはありません。

では、なぜ接続詞を入れるのでしょうか？ それは、「前の事柄」と「後の事柄」について、筆者がどのような考えを持っているのかが、接続詞を使うことで表現できるわけです。

接続詞とは、「語句・文章をつなげるために使う言葉」であり、前と後の「語句・文章」がどのような関係かを示すものであると同時に、筆者がどのように感じているかを示すものでもあるのです。

要約をする際に、筆者の考えに寄り添うことは非常に重要なポイントでもありますので、しっかりマスターしたいですね。

■ 今回の課題

以下の春秋のなかで、下線①②の接続詞でつながれた二つの文章を一文で形成して筆者が伝えたいことを具体的にしてください。

▼世の中を憂しとやさしと思へども飛び立ちかねつ鳥にしあらねば。山上憶良の歌には今でも胸にずっと染み入るものが多いが、これもそんな佳作の一つだろう。あえて訳せば、この世はつらいところだけど飛び去ることはできない、鳥じゃないから、といったところか。

▼およそ1300年の後に中島みゆきさんが紡ぎだした歌と、深いところで通じているように感じる。～人はむかしむかし鳥だったのかもしれないね～詩人たちにとって鳥のように空を飛ぶことは、かなわない思いや見果てぬ夢の象徴になってきた。だからこそ、自在に天空を舞う姿へのあこがれを美しい言葉で表してきた。①

▼一方で、実際に空を飛ぼうと苦闘した人たちもたくさんいたことを、歴史は伝えている。現代であれば科学者や技術者と呼ばれるような能力と、冒険家と呼ばれるような資質を兼ね備えた先人たち。そして1903年、ライト兄弟によって人が空を行き交う時代は切り開かれた。②もちろん、鳥の優雅さにはほど遠いけれど。

▼ドイツの格安航空会社の旅客機が墜落した事故は、副操縦士が故意に引き起こしたとの見方が強まっている。病気のせいで操縦士の資格を失うことを心配していた、とも伝えられる。飛び続けたい思いが強すぎて青年は闇にのみ込まれたのだろうか。夢は見果てぬ夢だからこそ美しい。そんな詩人の魂があったら、と思う。

(2015/3/31 付日本経済新聞 Web 朝刊)

■前回の課題の解答

前回の課題となった「春秋」の中で、空欄に入る接続詞は次の通りでした。

▼もともとあった米原ルート、湖西ルート、小浜ルートに加え、最近ではJR西日本が独自案を披露した。(さらに) 京都府の舞鶴市を経て関西国際空港へ向かうプランも浮上して5案乱立の異常事態である。地元選出の政治家や自治体、経済界などがそれぞれの計画を後押しし、思惑は入り乱れ、てんで決着の行方が見えない。

(2016/2/2 付日本経済新聞朝刊 抜粋)

「さらに」は、「添加」の意味です。後ろの文に出てくる「京都府の舞鶴市を経て関西国際空港へ向かうプラン」が添加されたわけですが、何に添加されたのでしょうか？ そうですね、「米原ルート」「湖西ルート」「小浜ルート」「JR西日本の独自案」の4つです。合わせて5つの案が乱立しているというわけです。

▼敦賀から京都へは在来線で90キロ余。(それでも) こんなに騒々しいのだから、日本人の鉄道への執着は理屈を超えているのかもしれない。そういえば大船渡線の一部区間は、東日本大震災後にBRT(バス高速輸送システム)が代役を務めている。(むしろ) 便利になったというが、レール復活にこだわる声は絶えないそうである。

(2016/2/2 付日本経済新聞朝刊)

「それでも」は「逆説」の意味ですね。たった「90キロ余」のことは、すんなり決まらべきなのに、逆に「騒々しい」結果になっているわけですね。

「むしろ」は、「言い換え」の役割を果たします。BRTが「代役を務めている」ことは、住民にとっては「便利になった」というわけですね。

いかがでしたでしょうか？ 接続詞は奥が深いですね。引き続いて、次の章でさらに深めてまいりましょう。